

2009年
7月2日
木曜日

林 宜嗣 教授（財政学）

選択の自由

— 新型インフルエンザとクール・ビズ —

私たちが持っている資源には限りがあります。それを有効に活用して、幸福を最大にするためには、選択の自由を確保することが必要です。しかし、一方で、選択の自由を制限しなければならぬこともありえます。クールビズと新型インフルエンザを題材に、「選択の自由」について考えてみます。

クール・ビズ（COOL Biz）は、夏期に行なわれる環境対策などを目的とした衣服の軽装化キャンペーンのことで、小泉政権下の2005年に始められました。6月1日から9月30日までの時期には霞が関の中央官庁では上着やネクタイをしている職員はほぼ見かけなくなりました。自治体も同じです。

気になるのは、「クール・ビズを実施しているのに、ノーネクタイでお願いします」という案内です。地

方分権の講演を頼まれたときに、主催者から何度もこのことが伝えられました。地方分権とは、地域の個性を活かした地域づくりが行えることです。これによって地域の限りある資源が有効に使えるようになるからです。

環境への負荷を考えて室温を28度と高めに設定することは賛成だし、進めるべきです。しかし、温度に対する感じ方には個人差があるし、「暑くてもネクタイをしたい」と考える人もいます。室温を高く設定するが、暑い人はネクタイをしめなくてもかまわない。つまり、服装の自由度を大きくすることで十分なのです。軽装を強いたり、ネクタイをしめていることに後ろめたさを感じさせるクール・ビズは「選択の自由」への流れに逆行するものであ

り、それが地方分権の講演での出来事なので驚きです。

次は新型インフルエンザです。新型インフルエンザはもちろん怖いことはいくらでもありません。しかし、それと同時に、困ったなあと思っただけでいくつかりました。マスクとマスクの報道、そして国の対応です。新型インフルエンザが流行りだした当初、若い人からお年寄りまで一斉にマスクをし、そして、一斉にマスクをしなくなりました。マスクをするかどうかはたしかに個人個人の主眼的な判断なのでしょうが、それにしても、右向け右、全員が一斉に動き出す、とくにマスクミに振り回される日本人の姿を見たような気がしたものです。

新型インフルエンザは国境すら関係がない世界的な問題です。国がきちんと対応すべきなのですが、厚生

労働省の動きは鈍く、自治体に対応をゆだねたことが、混乱を大きくしたことは否定できません。大阪府の橋本知事の「国は、新型インフルエンザは弱毒性だということを、国民にきちんと伝えるべきだ」という発言が印象に残っています。地方分権だからといって、新型インフルエンザへの対応において地方の選択の自由を認めるべきではないのです。新型インフルエンザが強毒性だったなら大変なことになっていたでしょう。選択の自由を認めるべき事柄と、認めてはいけない事柄を見極めることが重要なのです。